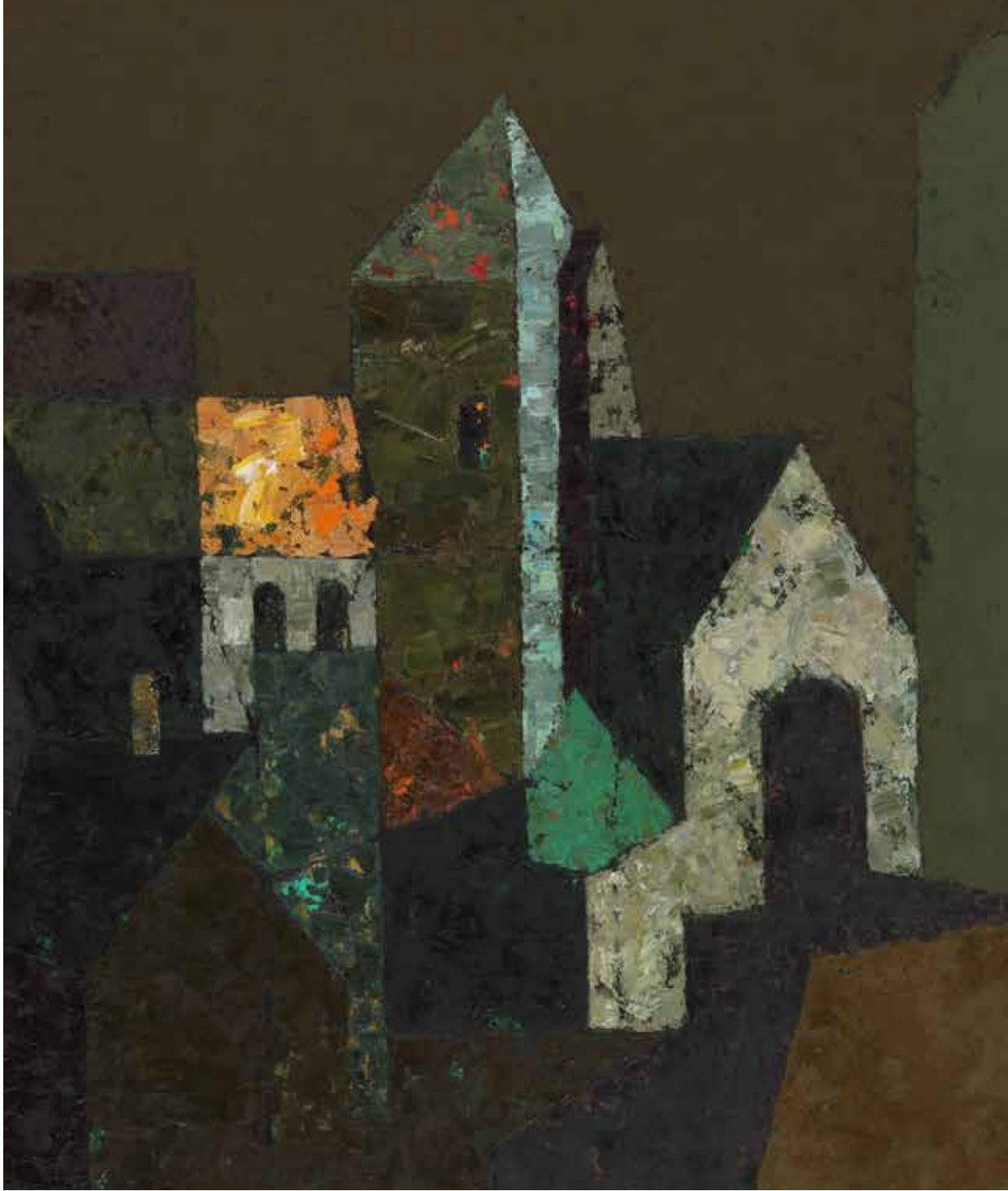


138

2022 AUTUMN

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 9

竹内清《ロマネスクの寺》(部分)
昭和53(1978)年
油彩・カンバス
112.1 × 145.5 cm

岡田三郎助と佐賀ゆかりの美術―佐賀県立美術館優品選

廣瀬 就久(主任学芸員)、福富 幸(副管理者)

（佐賀県立美術館学芸員）

佐賀県立美術館は、県政百年記念事業の一環として、1983年10月に旧佐嘉城三の丸跡に開館しました。同県にゆかりのある近現代の絵画、彫刻、工芸、書などの作品を収集し、展覧会を開催しています。佐賀県では美術館と博物館が隣接し一組織として運営されているところが特徴的で、両館は県の文化活動の拠点となっています。

本展では、同館コレクションから絵画70余点を精選し、合わせて県立博物館より、佐賀の歴史を紹介する文物と有田焼や鍋島更紗など佐賀が誇る伝統工芸を展示します。また公益財団法人鍋島報效会の協力により、岡田三郎助と百武兼行の代表作を揃え、肥前佐賀の美術を総合的に紹介するものです。

まず一番に同館のコレクションを際立たせているのは、岡田三郎助(1869-1939)の画業が通覧できる作品群です。同館にはOKADA-ROOMという展示室があり、岡田作品をいつでも見ることができます。岡田は佐賀藩士の子として生まれ、第1回文部省留学生として1897年に渡仏し、ラファエル・コラン(1850-1916)に学びます。帰国後、東京美術学校教授として西洋画科創立期より活動しました。《花野》[1917、図1]に見られるように、彼の繊細な筆致と優美な色調で描かれた女性像は、日本的な美意識を油彩画に展開したものとして高く評価されており、本展では女性像など初期の1894年から最晩年の1936年まで、21点を紹介します。

岡田が私淑した百武兼行(1842-1884)は佐賀藩士の子として生まれ、最後の藩主である鍋島直大なほひろの側近でした。直大とともに渡英して油彩画を学び始めます。その後フランスでレオン・ボナ(1833-1922)の指導を受けて、飛躍的に技量を高めました。《マンドリンを持つ少女》(1879、公益財団法人鍋島報效会蔵 佐賀県重要文化財)が代表作です。また岡田より先にコランから油彩画を学び、東京美術学校で教鞭を取った久米桂一郎(1866-1934)も、佐賀藩士で歴史学者であった邦武の子であり、明治期の日本美術における重要な画家のひとりに数えられます。

久米と岡田、美校西洋画科卒業者が発案者となり、「佐賀美術協会」が1913年に設立されました。同協会は毎年佐賀で展覧会を開催し、在京の佐賀県出身作家は、作品を佐賀へ輸送して展覧会に参加しました。同協会展は東京の潮流を佐賀にもたらす役割を担ったといえます。山口亮一(佐賀市生、1880-1967)など関連する画家の作品を展示します。

時代は下がって、第2次世界大戦後に独自の作風を貫いた古澤岩美(鳥栖市生、1912-2000)と池田龍雄(伊万里市生、1928-2020)を紹介します。古澤は、同郷の岡田三郎助宅に寄宿して本郷絵画研究所に学びました。のちに超現実主義の開拓者になりますが、1943年に応召され、中国へ送られ捕虜となり、46年に復員しました。戦争体験、戦後の諸相と裸婦を主題にして、不条理な世界を描いた画家です。銅版画集《修羅餓鬼》(1960-93)は



図1:岡田三郎助《花野》1917 佐賀県立美術館蔵 佐賀県重要文化財



図2:池田学《けもの隠れ》1999 個人蔵 (佐賀県立美術館寄託品)



図3:《肥前国産物図考のうち「小児の弄鯨一件の巻」》1773-84 佐賀県立美術館蔵 佐賀県重要文化財

総決算といえます。池田は1943年から45年まで服役し、50年の朝鮮戦争勃発を経て政治と社会に関心を寄せ、当時の状況を風刺的に描くペン画を制作しました。60年代以降は、《友に捧ぐ》(1991)など木や廃材を用いた立体作品を手がけます。

野村昭嘉(佐賀市生、1964-1991)は、気鋭のイラストレーターとして注目されながら不慮の事故で夭逝しました。《Amosu Norle》(1990)は第3回リキテックスビエンナーレ(1991)で入選しました。標題は野村の造語ですが、器物や仮面、波頭を、壁画のような材質感で空想的に描いています。2022年12月15日から23年2月5日まで同館では野村の大規模な回顧展を準備していますが、これに先駆け5点を紹介します。

古川吉重(1921-2008)の曾祖父は、佐賀藩10代藩主で鍋島直正の側近であった古川松根です。和歌と書画に優れていました。吉重は東京美術学校を卒業後、63年から活動拠点をニューヨークに移し、生涯を通じて抽象画を追求しました。

池田学(多久市生、1973-)は東京藝術大学美術学部デザイン科を卒業し、卒業制作で紙に丸ペンを使用して描く独自の技法を確立します。同大学院修士課程を修了後、文化庁芸術家在外研修員としてバンクーバー(カナダ)に滞在、現在はウィスコンシン州マディソン(米国)在住です。《けもの隠れ》[1999、個人蔵(佐賀県立美術館寄託品)、図2]を見ると、1日にわずか10cmしか描き進められないほどの緻密な細部が、丹念に集積されて大きな画面に広がっていきます。2017年の国内巡回展「池田学展 The Pen ―凝縮の宇宙―」などで、国内外を驚嘆させた注目の作家です。(廣瀬)

最後に、こうした画家たちを多数輩出した佐賀の風土や歴史、文化とはいかなるものであったかを少し紹介したいと思います。

佐賀県は九州の北西部に位置し、東は福岡県、西は長崎県、北は玄界灘、南は有明海に面しており、地理的にも大陸に近いことから早くから水田稲作を受け入れ、発展してきました。有名な吉野ヶ里遺跡をはじめ、数多くの弥生時代の遺跡があり、出土した国宝の鉄剣や銅鏡、ガラス製管玉など貴重な考古遺物を展示します。戦国時代、肥前・肥後・筑前・筑後・豊前を支配した龍造寺隆信(1529-1584)、そしてそのあとを継いだ鍋島家ゆかりの品々―武士道の経典、肥前論語として愛読される『葉隠』や豪華な蒔絵漆器、幕藩体制と鎖国政策の中でも海外に開かれていた佐賀で花開いた陶磁器、献上品であった鍋島緞通や更紗など、今日の佐賀を代表する伝統工芸が育まれてきました。また《肥前国産物図考》は、江戸時代、佐賀唐津藩内の海・川・陸で営まれた人々の生業を生き生きと伝えており、中でも総勢4～500人で行われたという玄界灘での捕鯨の様子を描いた「小児の弄鯨一件の巻」[図3]はダイナミックで見応えがあります。

古代より豊かな文化を有した佐賀では、防衛を担う土地柄でもあったせいか、幕末期には他藩に先駆け西洋の科学技術を取り入れ、藩政改革を推進、近代化を図りました。諸外国との関係を深め、結果、倒幕の一翼を担い、明治新政府を主導する役割をはたすことになります。美術の上でも重要な人物が数多く生まれた所以と言えるでしょう。

《岡山の美術》を冠する当館同様、地域に特色ある文化の顕彰に努める佐賀県立美術館・博物館が誇る《肥前佐賀の美術》に親しんでいただきたいと思います。(福富)

【特別展】「岡田三郎助と佐賀ゆかりの美術－佐賀県立美術館優品選」(会期:2022年9月28日～11月6日)

実践報告「暗闇ワークショップーさわって、つくって、みる」

岡本 裕子(主任学芸員)

ユニバーサル・ミュージアム事業「暗闇ワークショップ(以下、暗闇WS)」は、年1～2回の開催をめやすに継続して行っている。しかし、コロナ禍で開催を見合わせなければならない状況が2年半続いた。第5波がピークアウトの兆しを見せ始めた時期を契機に、2022年2月開催に向けて準備を進めた。が、年末年始を境に感染者が再び増加し、オミクロン株特別警戒期間(2022年1月13日～1月26日)、続けてまん延防止等重点措置期間(同年1月27日～2月20日)となったため3月開催に変更にした。

当館で行う暗闇WSは、「視覚から離れた解放感」「見る・見られるから自由になること」とおして、参加者が自分なりの何か新しい価値に出合うことをねらいとしている。今回のプログラム「さわって、つくって、みる」は、視覚を一切使わない暗闇という空間を設え、触常者・暗闇のスペシャリストである広瀬浩二郎さん(国立民族学博物館准教授)をファシリテーターに迎え、普段扱う機会がないであろう大量の粘土(1人約35kgの土粘土)を準備した。そして、小学校中学年から中学生とその保護者を対象とした部(2回)、高校生以上広く一般を対象とした部(1回)で参加者を募集した(各回5人)。まず、暗闇の中での体の使い方に慣れるためのアイスブレイク。次に、指先や手の平、腕、体全体を平面的・立体的に動かしながら大量の粘土を触察することで質感や量感になじむためのアイスブレイク。2つのアイスブレイクとおして視覚を使わない暗闇の中での触察に慣れた後、形のない「死後の世界」(もしくは「春夏秋冬」)というテーマで粘土と格闘(制作)し、その痕跡(作品)を触察し合う鑑賞を行った。粘土は、ちぎる、つける、ねじる、丸める、たたく、つなげる…等々加工しやすいというメリットがある。その反面、触察し合って鑑賞するためには、触り方のマナーが重要になる。今回は、触察という方法を駆使して制作と鑑賞を行うことで、触察のマナーにも気付いてほしいと考えた。

また、暗闇WSでは、ワークショップとおしての気づきを共有する時間を最後に設けている。小学校中学年から中学生とその保護者の部では、「暗闇は何も見えなくて、こわいものだと思っていた。でも、体験して、意外とドキドキわくわくするんだと思った」(小学校3年生)、「目で見ない手の感覚や耳で聞く音があって、新しい感覚に気づけた」(小学校4年生)、そして、高校生以上広く一般の部では、「普段、小さい子どもと一緒に出かけると、周囲の人の目がとても気になる。今日の体験は、見る・見られるということから解放されたとても楽しい時間だった」(一般)という気づきがあった。暗闇や目で見ない手の感覚・耳で聞く音は、目の不自由な人の世界、目の不自由な人のための感覚として参加者にはとらえられがちである。しかし、視覚が使えない体験ではなく、視覚を使わない体験としてプログラムを構成することで、視覚に惑わされない自分の感覚や自分の体内との対話が参加者の中に生まれ、自分にとっての新しい価値と参加者は出合うことができるのではないかと考える。

暗闇WS中参加者は、粘土との格闘の痕跡がどんなものであるのか最後まで見ることはないつまり、視覚を使わない体験を終始一貫して担保したという点を最後に付け加えておく。



図1:粘土と格闘(制作) 体全体を使って



図2:指先や手の平を使って



図3:コミュニケーションをとりながら



図4:痕跡(作品)

※ 図1～3はナイトモードで撮影
※ 参加者15人とファシリテーター広瀬さんが粘土と格闘した痕跡は、当館の公式インスタグラム(@okayama_kenbi)にて紹介

竹内清と中世キリスト教

橋村 直樹(学芸員)

岡山県立美術館では今秋、戦後岡山の美術界を牽引した竹内清(1911-2008)の多彩な仕事を紹介する企画展を開催する。

竹内は岡山市に生まれ、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)図案科と関西美術院夜間部で絵の研鑽を積み、帰岡後は二科会会員になるなど洋画家として活躍しながら、天満屋宣伝部に勤めてデザインの仕事も数多く手がけ、岡山大学やノートルダム清心女子大学で長年教鞭をとって後進の育成にも尽力した人物である。

竹内の遺した仕事を俯瞰すると、二科展出品作を中心とした数々の油彩画から、モニュメンタルな陶板壁画や緞帳図案、パンフレットやポスター、本の装丁など大小さまざまなデザイン、さらにはキリスト教のシンボルについての著作物*1まであり、彼が洋画家・デザイナー・教育者・キリスト教美術研究者として幅広く活躍したことがよくわかる。なかでも、中世キリスト教美術についての関心と研究は、上述の著書へ結実すると同時に、彼の70年代以降の絵画作品にも影響を及ぼしているため注目に値するだろう。

そもそも竹内の宗教への関心は、終戦後に疎開先で線刻の石地藏の拓本をとっていた折り、「無常が実相であり、何一つ頼れるもののない戦後の混乱期に、宗教だけが不変の姿に思え」*2たことにあったというが、とりわけキリスト教の造形について研究するようになったのは、キリスト教精神に基づくノートルダム清心女子大学に教授として着任した1967年以降のことである。また、西洋中世美術史家の泰斗、柳宗玄の『西洋の誕生』(新潮社、1971年)との出会いによって、竹内の関心は初期から中世にかけてのキリスト教の象徴的なものへと傾倒した。さらに竹内は、1972年にギリシャとイタリアを、1974年にフランスを、1980年に再びギリシャとイタリアを調査旅行することで、キリスト教の象徴への関心をより強めていった。旅先での数々の風景スケッチを見てみると、1972年の旅では名高い古代遺跡を主に訪れながら、中期ビザンティン時代のモザイク壁画が遺るオシオス・ルカス修道院にも立ち寄っていることがわかる(図1)。1974年のフランスの旅では、パリとイル・ド・フランスを巡り、シャルトル大聖堂やゴッホの作品で知られるオーヴェルのノートルダム聖堂などを訪れている。1980年の調査旅行では、初期キリスト教とビザンティン期のモニュメント歴訪が主目的だったため、ギリシャでは、オシオス・ルカス修道院と並び中期ビザンティン時代を代表するモザイク壁画が遺るアテネ近郊のダフニ修道院を訪れ、イタリアでは、初期キリスト教からビザンティン時代のモザイク壁画を有するモニュメントが点在する古都ラヴェンナを巡り(図2)、ヴェネツィアでは、ビザンティン式モザイク壁画の残るサン・マルコ大聖堂やトルチェッロ島のサンタ・マリア・アッスンタ聖堂を訪れている。

こうしたビザンティンやロマネスク、ゴシックの荘厳な中世オリスト教世界を実体験した3度の渡欧とキリスト教美術の研究は、今号の美術館ニュースの表紙を飾る《ロマネスクの寺》(岡山県立美術館蔵)や《ヴェネツィア、ある日》(京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵)といった70年代後半から80年代にかけての寒色を基調とする重厚で静謐な絵画作品に反映されることとなったのである。

【岡山の美術 特別展示】「竹内清展」(会期:2022年10月4日～11月6日)



図1:1972年のスケッチ帖より「オシオス・ルカス修道院」



図2:1980年のスケッチ帖より「サン・ヴィターレ聖堂、ラヴェンナ」

*1: 竹内清『象徴の造形—キリスト教のシンボルについて』(南窓社、1981年)

*2: 同上、189頁。

新収蔵品紹介

File 21

池田遙邨《波浪》

橘 凜(学芸員)



図1:《波浪》制作年不明 紙本着色

池田遙邨(1895-1988)は、主に大正～昭和期に京都で活躍した岡山出身の日本画家です。本稿では、昨年度ご寄贈を受けた遙邨作品より《波浪》(図1)をご紹介します。

本作は幅約70cm、画面全体に波立つ海原を描き出した作品です。白波は画面上部の岩礁に叩きつけて大きな飛沫を上げ、また画面右上から手前に向けても打ち寄せています。海面は明るい青緑や深みのある紺など、幾重にも重ねられた線の集合により表され、うねり渦巻く海の立体感、躍動感が捉えられています。

さらに見てゆくと、岩礁より奥(画面上部)の海は波が比較的落ち着き、鑑賞者の視線は水平線を見通します。左端に描かれた黄色の小舟は、画面中央に向かいゆっくりと進んでいるようです。岩礁あたりを境とした上下の動と静の対比や、視点の近接・望遠の組み合わせにより、手前の波の迫力を際立たせる画面構成となっています。

「私は明るい瀬戸内海が一番親しみがある。しかし太平洋も日本海もそれが平穏な日であっても荒れた日であっても、海といえば無性になつかしく、昔も今も変りない愛情を持ちつづけている。」(『造形』第5巻第8号(昭和34(1959)年12月)掲載「波によせて」より抜粋)^{*1}

風景を愛し写生の旅を重ねた画家・池田遙邨は、その中でも一際海に目を向けました。本作のような海原を画面全体に描く作品は、特に昭和20年代から晩年に渡り数多く制作されています^{*2}。代表的なものに日本芸術院賞を受賞した第2回新日展出品作《波》(昭和34(1959)年、個人蔵)があり、また当館所蔵の《暗夜》(昭和38(1963)年、図2)もそれに類する作品の一つと言えます。

これらの作品と比較すると、本作は波を表す線が未整理であること、海以外のモチーフを最小限に抑え波の描写に徹していること、空間に奥行きがあることなどが特徴に挙げられます。より写生に近い臨場感があり、変化し続ける波の表情そのものを表すことに焦点を当てた作品と言えるでしょう。

今回ご紹介した《波浪》は、同時にご寄贈を受けた遙邨の海の素描などと共に、10月4日～11月6日の「岡山の美術展」で展示予定です。ぜひこの機会にご覧下さい。



図2:《暗夜》昭和38(1963)年 紙本着色

*1:『池田遙邨 資料集』(倉敷市立美術館、1994) 81頁

*2:主な参考画集・図録…

・『池田遙邨画集』(マリア書房、1972)

・『池田遙邨』(朝日新聞社、1980)

・『京都画壇の巨匠 池田遙邨展』(姫路市立美術館・碧南市藤井達吉現代美術館・倉敷市立美術館・中日新聞社、2011)

展覧会スケジュール

9月
September9月7日|水|—9月18日|日|
第73回 岡山県美術展覧会

9月28日|水|—11月6日|日|
【特別展】
岡田三郎助と佐賀ゆかりの美術
佐賀県立美術館優品選

佐賀県立美術館は1983年に開館しました。同県にゆかりのある近現代美術の作品を収集しています。所蔵品を際立たせているのは、東京美術学校教授として西洋画科創設期より活動した岡田三郎助です。女性像が高く評価されています。代表作を含め、初期から晩年までの作品が通覧できる作品群です。岡田が私淑した百武兼行、岡田とともに活動した久米桂一郎は、明治の日本美術を考えるうえで重要な画家と言えます。あとの時代では、第二次世界大戦の体験や戦後の世相をもとに独自の作風を貫いた古澤岩美や池田龍雄、気鋭のイラストレーターとして注目されながらも夭逝した野村昭嘉、そして注目の現代美術家池田学などが知られる画家です。公益財団法人鍋島報効会の協力を得ながら、佐賀ゆかりの多彩な絵画70余点を展示します。そのうえで、佐賀の歴史を紹介する文物や、有田焼、鍋島更紗など佐賀が誇る伝統工芸を紹介します。

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

10月
October10月4日|火|—11月6日|日|
【岡山の美術展】
竹内清展

10月8日|土| 14:00-15:30
記念講演会 「肥前佐賀と美の流転」
講師 福井尚寿氏(佐賀県立美術館・佐賀県立博物館館長)
会場 2階ホール ※要観覧券(半券可)

10月15日|土| 14:00-15:30
記念講演会 「佐賀県の美術と画家野村昭嘉」
講師 野中耕介氏(佐賀県立美術館学芸課美術系担当係長)
会場 地下1階講義室 ※要観覧券(半券可)

10月29日|土| 14:00-15:30
美術館講座 「竹内清と中世キリスト教世界」
講師 橋村直樹(学芸員)
会場 地下1階講義室(事前予約申込先着順50名) ※聴講無料

11月
November

11月12日|土|—12月25日|日|
【岡山の美術展】
第12回 I氏賞受賞作家展
江村忠彦・志村佳苗・大島愛・柳楽晃太郎
【岡山の美術展】
もっと伝統工芸 金属工芸

11月17日|木|—12月4日|日|
【特別展】
第69回 日本伝統工芸展 岡山展

前期:12月4日|日|—12月18日|日|
後期:2023年1月15日|日|—1月29日|日|

【教育普及展】
第4回 みんなの参観日
「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」

みんなの参観日は、「図工の時間・美術の時間」の中で大切にされている子どもの思いや主題、そして先生の支援や子ども同士の関わりを切り口とした「子どもの学び」を美術館に展示して、みんながそれを参観する場です。

12月
December

収蔵品の紹介 Vol. 9
竹内清《ロマネスクの寺》
昭和53(1978)年 油彩・カンバス 112.1×145.5cm

1970年代になると竹内清は、ギリシャやイタリア、フランスを巡り、中世キリスト教美術から感化を受けた。本作では、堅牢で重厚感のあるロマネスク聖堂のファサードや鐘楼、身廊が抽象化されて平面的に構成され、深緑や濃紺、茶色といった渋く深みのある色彩で描かれている。(橋村)

館長コラム

好きこそものの・・・

守安 収

この酷暑の中にあっても、備中国分寺の近くにあるわが家周辺ではウォーキングやジョギングを楽しむ人たちを見かけます。熱中症で倒れるのではないかと心配しながらも、つい応援するのは、はるか50年ほど前にラグビーをやっていた経験によるようです。当時は2時間超の練習の間、水分補給は厳禁、うさぎ跳びで200メートル、肩車をして階段上り競争(罰則付き)など、今ではありえない危険満載のメニューが日常でした。夏合宿では疲れ切って食べ物がのどを通らなくても、「たこ部屋」なんだからとなぜか納得していました。それでも続けることができたのは、結局、好きだったからでしょう。そして、どうして好きだったのかを考えることもなく現在に至り、友人からもらったオールブラックスのロゴが入ったリュックサックを愛用し、テレビ観戦に励んでいます。そうはいつても、人が一生をかけて走る距離は大学時代に済ませているので、いまさらジョガーにはなれません。▼「好きこそものの上手なれ」としばしばいわれます。美術の分野、それが制作についてはいくら好きでも上手にならず、上手いかわない場合が多々ある一方で、鑑賞に関してはみごとに当てはまり、学芸員においてはサービス精神の持ち主であるならば大丈夫でしょう。ともあれ、私どもの館は、美術好きの人だけを対象に運営するわけではありません。美術がもつ多面的な価値をさまざまな手法を駆使して提供することによって、新たに「美術が好き」「美術は楽しいもの」と意識する人や「好きでないけど気になる」人が一人でも多く増えることを願っています。まずは、関心が向けられる場になるように、ですね。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようお願いします。

編集後記

中西ひかる

9月になりましたが、なかなか涼しくなる気配はなく、未だ暑い日が続いており、なんとなく去年に似ている今年も、秋がないのではないかという予感がしてしまいます。今月の28日からは、岡田三郎助の作品や有田焼などの工芸作品といった佐賀県立美術館の所蔵するコレクションを展覧する特別展と、10月4日から岡山の美術展にて県内ゆかりの作家である竹内清を取り上げた特別展示がスタートします。両展示が始まる頃にはもう少し涼しくなっていることを祈りつつ、今年もぜひ当館で芸術の秋をお楽しみいただけたらと思います。